

部会長報告

- 第2回 琉球文化継承・振興検討部会 1
- 第2回 新・首里杜構想検討部会 2

部会長報告（琉球文化継承・振興検討部会 波照間部会長）

1. 主な議事等事項

- (1) 部会長代理の選出
- (2) 第1回合同会議のふりかえり、「琉球文化のルネサンス」の捉え方について
- (3) 首里城復興基本計画たたき台について

2. 主な内容

- (1) 部会長代理の選出
「有識者懇談会の部会について」第3第4項に基づき、崎山律子委員を指名。
- (2) 「琉球文化のルネサンス」の捉え方について、たたき台についての意見等

【琉球文化のルネサンスについて】

- ① 琉球ルネサンスというものが目指す、歴史的な時代はどこなのか。
事務局：過去の一時代にとどまるのではなく、今につながっている文化をしっかりと評価し、将来に向かって新しい沖縄の文化を創っていくイメージを想定している。

【首里城復興基本計画たたき台について】

- ① ルネサンスというのは、沖縄県民全体が主体にならないといけない。琉球ルネサンスは、庶民のバイタリティ、生活力、創造力、それが在りし日の琉球文化と一緒にあって興っていく。
- ② 職人に技術を継承していくためには、「本物」に触れる機会も重要。海外に流出した文化財等の里帰り展や、周年事業として沖縄の資料を保存している国内外の美術館、博物館も巻き込んだ、広がりのある展覧会等の取組が必要。
- ③ 工芸という世界はそのまま産業として成り立つものもあるが文化として残していくような見分けも必要。
- ④ 工芸の産業化には「オープン化」、「多様性」、「継続性」という3つのキーワードを意識することが必要。
- ⑤ 我々の生活を含めて、伝統から革新へという大きな流れの中にある。「アカデミズム」の研究者がその価値を発掘し、保全・保護に向かう。そのアカデミズムの動きを「ジャーナリズム」が世の中に広めていく。ジャーナリズムが動いたところで産業化、「コマーシャルリズム」の力が働く。そしてそれが「ポピュラリティ」、一般化していくと市場が実現して、工芸も産業として成り立っていく。すべて一つの線をつなげた取組が必要。
- ⑥ 首里城において演じられる芸能は小道具に至るまで細部にこだわりを持ち、琉球文化の粋を集めた在りし日の琉球文化を首里城から発信するべき。
- ⑦ 伝統文化の次世代への継承には、教育面での取組が必要。
- ⑧ 首里城を単に有形のものではなく、無形の文化、祈りの空間として捉えることも大切。

部会長報告（新・首里杜構想検討部会 池田部会長）

1. 主な議事等事項

- (1) 部会長代理の選出
- (2) 第1回合同会議のふりかえり、新・首里杜構想の策定について
- (3) 歴史まちづくりについて（沖縄総合事務局）、都市計画による首里のまちづくり及び首里城周辺地域の交通施策について（那覇市）

2. 主な内容

- (1) 部会長代理の選出
「有識者懇談会の部会について」第3第4項に基づき、田名真之委員を指名。
- (2) 第1回合同会議のふりかえり、新・首里杜構想の策定についての意見等

【首里杜構想の評価について】

- ① 首里八景の大半を整備済みとしているが、地元の認識と食い違いがある。首里城から見たスカイラインの保全や電線地中化など、細部を評価して歴史的風土保全地区の整備を検討すべき。

【新・首里杜構想について】

- ① 首里杜構想で掲げた事項のやり残しに取り組むのではなく、新しい理念の下で今後のまちづくりを検討・整備していくべき。
- ② 新・首里杜構想には、首里城復興の理念である正殿等の早期復元や首里城公園のさらなる魅力向上等の考えを入れていくことが必要。
- ③ 収蔵庫の機能を県営公園内の中城御殿に移設・整備する案に関し、正殿等の復元工程を踏まえ、専門委員会等を設置し具体化していくべき。
- ④ 交通対策に関し、定量的な議論の後に目標とするレベルの共有が必要。
- ⑤ 自然・歴史・文化が調和する風格あるまちづくり、面として文化財を整備し周遊できる環境づくり、まちのキャパシティへの配慮、先端デジタル技術を活用した情報発信、負の遺産と言える戦跡の活用等が必要（首里杜地区まちづくり団体連絡協議会）。
- ⑥ 首里地域では、近年、様々な遺跡・遺構が確認されているが、真実性を担保した復元・整備、それらを共存させた活用の検討が必要。

【推進体制について】

- ① 計画や事業に係る連携・推進体制ではなく、計画後も体制を継続・充実させる仕組み、教育機関も含めることが必要。
- ② 市、県、国が効果的に連携し、住民、教育機関や有識者等を含めてプロジェクトを推進していく体制が必要。